

6 世紀中国大陸の歴史地理

日 野 貴 之

Historical Geography of Mainland China in 6th Century

Takayuki HINO

2017年9月6日受理

抄 録

江南の農地拡大と人口増加は、後漢末から約四百年間続いた中国大陸南北の分裂状態をもたらした。本稿では洛陽伽藍記における陳慶之上洛時のエピソードを中心に、同時代の南北比較論などから六世紀前半における中国大陸の歴史地理を考察する。

キーワード：中国大陸、歴史地理、洛陽、梁、北魏

§ 1. はじめに

六世紀初頭、中国大陸南部において齊から梁へと王朝が交代した。501年、齊の雍州刺史だった蕭衍（武帝）は、暴政を敷いていた皇帝蕭宝卷（東昏侯）を討伐し、翌年皇帝に即位した。本稿では資治通鑑の記述を中心に梁書、魏書などの記述と比較しながら陳慶之の北伐に至る政治軍事情勢を地理的な視点から考察し、また洛陽伽藍記の陳慶之上洛時の記述から六世紀前半における中国大陸の歴史地理を俯瞰する。

§ 2. 陳慶之の北伐までの経緯

南北両朝は齊の時代にも国境線付近で断続的に戦火を交えていたが、梁朝の成立後も北魏との国境における紛争は続いた。梁朝の創始から間もない503年冬、早くも魏軍が司州（梁の僑州、河南省信陽市）へ来攻し、翌年には司州と梁州（陝西省漢中市）を相次いで陥落させた。元恪（宣武帝）は邢辯を漢中に派遣して平定を進めさせた。

505年、蕭衍は臨時の税を課して軍資とし、弟の蕭宏を主将として北伐の軍を起こした。同時に魏の諸将に対する調略工作も行われたようで、翌506年には皇族の元翼、元樹らの兄弟が亡命して来た。506年夏には張惠紹が宿預城（江蘇省宿遷市）、昌義之が梁城、韋叡が合肥城（安徽省合肥市）、裴邃が羊石城、霍丘城（安徽省六安市）、桓和が朐山城（山東省濰坊市）と国境付近の魏の諸城を次々と陥落させた。元恪は邢

鬻に六州十万の大軍を与えて防がせた。邢鬻は兗州一帯を奪回し楊大眼と合流して宿預を包囲した。梁軍は清南に築城して備えていたが、邢鬻がそれを攻め落としたため守り切れず宿預を放棄して撤退した。戦況が北魏有利に傾いたため元英、楊大眼らの率いる魏の大軍が淮水南岸の鐘離（安徽省鳳陽県）への攻撃を企図した。蕭衍は曹景宗、韋叡、裴邃らに鐘離の救援を命じた。507年四月、鐘離城とその北の邵陽洲付近で大規模な戦闘が発生し、梁軍が大勝した。これが鐘離の戦い、または邵陽の役と呼ばれる戦役である。

508年十月、蕭衍は弟の蕭憺に北伐を命じた。これに呼応して懸瓠（河南省駐馬店市）の白早生なる者が北魏の刺史を殺害し、梁の蕭秀へ救援を求めた。蕭秀は応急の処置が必要だとして、朝廷の判断を仰ぐ前に援兵を送った。これにより懸瓠以南は義陽を除き、ほぼ梁の支配下となった。北魏は邢鬻を前軍、元英を後軍として出動させ、邢鬻は懸瓠を回復した。511年には琅邪（山東省臨沂市）の賊により梁の太守が殺害された事件を契機に、梁魏双方が軍を送って戦い梁が勝利した（胸山の戦い）。西方においては張齊が益州方面に長らく駐屯し、葭萌（四川省广元市）付近で魏軍と断続的に戦火を交えた。

515年に元恪が崩御すると第二子の元詡（孝明帝）が即位したが、母親の胡太后（靈太后）が実権を握り、北魏の朝政は混乱した。さらに520年から525年にかけては胡太后の妹婿の元叉が胡太后を幽閉し、朝政を壟断した。北魏はこのような内部事情を抱えていたため、梁に対する大規模な軍事行動を実施できるような状況にはなかった。521年、義州刺史文僧明が魏に寝返ったため、蕭衍は裴邃に討伐を命じた。しかしこの時は、義州を回復していったん戦火は収束した。

523年、破六韓拔陵が北魏の北辺の沃野鎮で蜂起し、六鎮の乱が始まった。524年夏、北魏の北辺の叛乱は拡大しつつあり、北魏は梁に対して守勢に回らざるを得ない状況だった。蕭衍は元樹らへ北伐を命じ、成景雋が童城、睢陵城（江蘇省徐州市）を相次いで攻略した。また裴邃は寿陽（安徽省淮南市）を攻撃し、外城を破ったが攻略には至らなかった。裴邃は元樹の本軍と合流して青州方面に転じ建陵（江蘇省徐州市）、曲流を攻略した。彭宝孫は琅邪、檀丘、東莞（山東省臨沂市）まで進出し、彭城の東方はほぼ梁の支配下となった。裴邃は合肥方面に戻り狄城（安徽省六安市）、甕城を攻略し黎漿に駐屯して寿陽へ圧力を加えた。寿陽の西の義陽（河南省信陽市）方面でも梁魏両軍の戦いがあった。

525年春、北魏の防衛の要衝、彭城（江蘇省徐州市）を統治していた元法僧が梁に投降し、蕭衍は陳慶之らにその接管を命じた。幼少時より蕭衍の側近として仕えたとされる陳慶之は不惑を過ぎたところであるが、史料で軍歴が確認できるのは、この時からである。蕭衍が二年後の渦陽城攻略の際に陳慶之を賞賛した詔の中に「軍人でも名門の家柄でもなかったのがこれまで活躍の機会を得られなかった」という言葉があり、もともと陳慶之は蕭衍の側近として北魏からの比較的身分の高い亡命者の応接、情報収集を担当しており、当初は北魏の国内事情に通じたいわゆる情報将校のような立場で従軍していた可能性も考えられる。そしてそのような経歴が、後の元顥の洛陽

帰還の際に指揮官に任命されたこととも関係しているのではないか。

裴邃は寿陽と義陽の中間に位置する新蔡（河南省駐馬店市）を攻略すると、寿陽方面での攻撃を続け反撃して来た魏軍五万を破ったが、その後陣中で病没し夏侯竄が後任となった。梁は攻勢をいったん中止した。蕭衍は次男の蕭綜を彭城に駐屯させた。しかし蕭綜は情緒不安定な人物で、自らの出生に疑念を抱いて程なく北魏に投降し、彭城は再び北魏の支配するところとなった。

526年夏、淮水が氾濫したのを知って、蕭衍は元樹と夏侯竄に寿陽攻略を命じた。魏軍の抵抗は弱く、陳慶之は夏侯竄軍の先鋒として寿陽を攻略した。梁は予州府を合肥から寿陽に移し、合肥を南予州とし夏侯竄を二州の刺史として北伐を続行させた。527年、曹仲宗が渦陽城（安徽省亳州市）を攻めた。北魏は十五万の援軍を差し向けたが、陳慶之はその先鋒を迎撃して打ち破った。魏軍は渦陽の周辺に十三城を築いて守っていたが、陳慶之は夜襲によって四城を落とし渦陽を降伏させた。

§ 3. 陳慶之の北伐

北魏の朝廷では胡太后が復権していたが、皇帝の元詡は秀容（山西省忻州市）の契胡の族長、爾朱栄を洛陽に召し出そうとした。528年二月、元詡は急死するが実母の胡太后により毒殺されたと推測されている。胡太后は三歳の元釗を擁立した。爾朱栄は挙兵を決意し、元子攸（孝荘帝）を自軍に迎えて即位させ、四月にはほとんど抵抗を受けることなく洛陽に入城した。そして胡太后と元釗を黄河へ沈め、また百官を集めて虐殺した。この事件が、陳慶之の北伐の遠因となった河陰の変である。河陰の変の衝撃は大きく、義陽に駐屯していた元願達が内応してきたのを皮切りに北魏の皇族の元顥（北海王）、元彧（臨淮王）、元悦（汝南王）が梁へ亡命して来た。また北青州刺史元世雋、南荊州刺史李志、豫州刺史鄧獻は任地を伴って投降して来た。

北では高平鎮の万俟醜奴が、河北方面では他の反乱勢力を吸収した葛栄が強勢であり、六月には青州の北海で邢杲が反乱し河北からの難民を吸収した。九月、爾朱栄は鄴を攻撃していた葛栄と滏口で戦って大勝利捕らえた。葛栄の身柄は洛陽に送られて市で斬られ、これによって六鎮の乱は終息へ向かう。

梁は元顥を北帰させて帝位に即けることを決定し、その護衛を陳慶之に命じた。羊侃が泰山（山東省泰安市）で反乱を起こして内応してきた情勢を踏まえての決定であろう。元宏（孝文帝）の子ではあるが人格に問題のある元悦や皇族としては傍流の元彧と比較して、拓跋弘（献文帝）の孫である元顥を皇位継承者として選んだものと思われる。北伐軍はまず鉦城を攻略して拠点とした。

529年四月、陳慶之の北伐軍は鉦城（安徽省宿州市）から鄴城（河南省商丘市）へ進攻を開始した。この時、邢杲の叛乱は続いており、北魏の朝廷は陳慶之の兵力が一万に満たないことを侮り邢杲の討伐を優先させた。このため北魏軍は彭城から東に展開しており、陳慶之はその裏をかいて彭城の西を北上したものと思われる。丘大千の魏軍七万は睢陽（河南省商丘市）に九城を築いて守っていたが、うち三城が陳慶之に落とされると魏軍は戦意を喪失し睢陽は降伏した。ここで元顥は即位し年号を定め

た。

元暉業の軍二万が南下し、四面に河水の堀を巡らせた考城（河南省商丘市）を守ったが、陳慶之はこれを落として元暉業を捕虜とし、多くの物資を捕獲した。さらに大梁（河南省開封市）へ進み、ここから黄河の南を西へ向かった。楊昱、元慶、元顥恭の率いる七万の大軍が滎陽（河南省鄭州市）を守った。爾朱兆の契胡騎兵五千と魯安の夏州歩騎兵九千を先鋒とする元天穆の大軍が到着しつつあった。兵力的には圧倒的に北魏側が優勢だったが、陳慶之は城壁を強行突破して城内へ突入し大勝した。魯安は降伏し、爾朱兆と元天穆は敗走した。洛陽の最終防衛拠点である虎牢城（河南省鄭州市）を爾朱世隆の騎兵一万が守っていたが、戦わずに逃走した。元子攸は黄河を渡って河内方面へ逃れた。皇族の元暕、元延明以下多くの高官が元子攸を見捨て、洛陽に元顥を迎え入れる準備を始めた。大梁を落としてから五日後に虎牢、七日後に洛陽へ入城するという速さだった。陳慶之軍の本隊が洛陽方面へ去ると、北魏側は反撃に転じて睢陽と大梁を奪回し梁軍と本国との連絡線を遮断したが、陳慶之は洛陽から取って返してこれらを奪い返した。梁書陳慶之伝によれば、鉅縣を出発してから洛陽に入城するまでの百四十日間に三十二城を攻略し、四十七の会戦全てに勝利したとされている。

元顥が洛陽に入ると河南各地の刺史や太守は、元顥側に付くものと元子攸側に残る者に分かれた。このような不安定な情勢であるにもかかわらず、元顥は早くも酒色に溺れるようになった。元暕と元延明は陳慶之を警戒し、元顥から遠ざけた。一方、本拠地の晋陽方面に滞在していたと思われる爾朱榮は直ちに長子（山西省長治市）の元子攸の下に駆けつけた。元顥側が進駐して来た河内（河南省焦作市）を奪回し、元天穆も合流した。爾朱榮、元天穆らは鮮卑、柔然など北辺の胡族の大軍を動員して反攻を開始した。陳慶之は黄河を渡り、北中城を守って奮戦した。爾朱兆と賀拔勝は硤石で黄河を渡り対岸を守っていた元顥の子、元冠受の軍を破った。これによって元顥側の諸将は雪崩を打つように逃亡を始め、元顥の洛陽支配は六十五日間で終わった。元顥は南へ逃亡したが殺害され、陳慶之は僧に変装して命からがら梁へ帰還した。

§ 4. 陳慶之の北伐後の情勢

元顥の擁立が失敗に終わると梁は、今度は元悦を北魏の皇帝に擁立することに決めた。一方洛陽においては皇帝の元子攸が岳父の爾朱榮を疎むようになり、皇族の元徽らは元子攸に爾朱榮の誅殺を勧めた。

530年九月、元子攸は明光殿に参内した爾朱榮、爾朱菩提の父子と元天穆を謀殺した。爾朱榮の従弟、爾朱世隆は城外へ逃亡したが、態勢を立て直すべく洛陽城外に布陣した。元子攸は城民から兵を募って戦わせたが勝てなかった。李苗が玉碎と引き換えに河橋を焼き、爾朱世隆はようやく北へ去った。爾朱榮の甥の爾朱兆は、任地の汾州から晋陽へ拠点を移した上で爾朱世隆と合流し、元曄（東海王）を皇帝に擁立した。爾朱兆は洛陽へ侵攻して元子攸を捕らえ、晋陽に連行して殺害した。こうして再び爾朱一族が政治の実権を握ったが、爾朱榮のような傑出した指導者はおらず、爾朱世隆

らは洛陽に残って朝廷を掌握し、爾朱兆は晋陽、爾朱仲遠は大梁、爾朱天光は関中に割拠した。531年二月、爾朱世隆らは元暉を廃位し、元恭（節閔帝）を新皇帝とした。河西の紇豆陵步藩が河東に侵入し、苦戦した爾朱兆は高歓を招きこれを撃退した。高歓は六鎮の乱の残党を麾下に加える許しを爾朱兆から得て、彼らを率いて太行山脈を越え信都へ移動した。高歓の下には爾朱一族を嫌う者が次々と加わったため、爾朱世隆は高歓の懐柔を試みたが531年六月、高歓はついに決起し、元朗（安定王）を皇帝に擁立し爾朱一族に対抗した。兵力的には爾朱一族側が圧倒的に優勢だったが、高歓は流言によって爾朱兆と爾朱仲遠、爾朱度律の離間を計り、仲遠らは戦わずに帰還した。高歓は広阿で爾朱兆の軍を破った。十一月、高歓は鄴の攻撃を開始した。

532年正月、高歓は鄴を攻略した。爾朱一族側は爾朱天光が長安から、爾朱兆が并州から、爾朱度律が洛陽から、爾朱仲遠が東郡から計二十万の大軍が鄴へ向かった。高歓は封隆之に鄴を守らせ、自らは韓陵に出て爾朱一族の軍と決戦した。高歓の兵は騎兵二千、歩兵三万弱だったが、高歓の従弟高岳、斛律敦、高昂（敖曹）らの活躍により勝利した。韓陵の戦いの結果、爾朱一族に従っていた諸将は次々と離反し、爾朱天光と爾朱度律は捕らえられ、爾朱世隆は殺害された。爾朱兆は并州に戻り、爾朱仲遠は梁へ亡命した。この情勢を見て高平鎮に駐屯していた爾朱天光の部将、賀拔岳は長安を占領した。

高歓は元朗の皇帝としての正統性に不安を抱くようになった。英邁な元恭をそのまま帝位に留めることを薦める声もあったが、高歓は元恭も傀儡としては不相当だと判断し、結局元脩（孝武帝）を次の皇帝に選んだ。

この間、元悦がどのように洛陽へ帰還したのかに関して詳細は不明である。既に530年六月、梁は元悦を魏王として再度の北伐を画策していたが、実際に元悦が洛陽に帰還したのは532年と考えられる。梁書武帝本紀には、正月に薛法護に元悦の洛陽帰還を護衛させたとしか記されておらず、その後の推移は不明である。二月には同じく北魏からの亡命皇族である元法僧を東魏王にし、青州方面への北伐を命じていることから、爾朱一族と高歓の争いに乗じて梁が北に対する軍事行動を企図していたことは確かだが、高歓が洛陽に入るまで元恭が洛陽を離れたという記録は無く、元悦が先年の元顥のように梁軍を伴って軍事的に洛陽を攻略したとは考え難い。高歓が元悦を招いたとする魏書や北史の記述が正しいとすれば、高歓と梁側の間でなんらかの交渉が成立したか、あるいは高歓が使者を送って元悦が独断でそれに応じたものと推測される。いずれにせよ韓陵の戦いで高歓の優勢が確定したのは閏三月末のことであり、その後高歓が洛陽に滞在したのは四月下旬の十日余りの短期間で、この間に元脩を探し出して即位させ、自らは大丞相太師に任命されるとさっさと鄴へ帰還している。その直後に元恭は殺害された。これらの時系列から考察すれば、韓陵の戦い以前に元悦は高歓の下へ投じており、元悦の資質に失望した高歓が、洛陽に入る時点で既に元恭、元朗、元悦の三人以外の皇位候補者を探す方針を固めていた可能性が高い。十一月には元朗と元暉が殺害され、元悦は大司馬に任じられるが翌月には誅殺されている。元悦がこの年に洛陽に帰還したことは事実と思われるが、皇位の候補者から外されてか

ら誅殺されるまでの経緯は不明である。

鄴へ戻った高歓は、滏口から并州に入り爾朱兆を攻撃した。爾朱兆は一族の出身地である秀容（山西省忻州市）へ逃げ、高歓は晋陽に大丞相府を置いて本拠地とした。翌年、高歓は爾朱兆を滅ぼした。

賀拔岳は関中に割拠して高歓に対抗する姿勢を示していたが534年、秦州（甘肅省天水市）の侯莫陳悦に謀殺された。賀拔岳配下の諸将は、宇文泰を後継者に選んだ。宇文泰は侯莫陳悦とその与党を討った。高歓と元脩の関係は悪化しており、高歓は元脩の排除を決めて軍を発した。元脩側の士気は奮わず、元脩は西へ逃亡し宇文泰に迎えられた。穰城（河南省南陽市）に割拠していた賀拔勝は元脩の要請に応じて北へ向かったが、留守中に穰城の州民は高歓に内応し、結局賀拔勝は梁へ亡命することとなった。高歓は洛陽で元善見（孝静帝）を新帝に擁立すると鄴へ遷都した。東方の諸州は次々と高歓に服した。宇文泰は元脩を殺害して翌年元宝炬（文帝）を擁立し、魏の東西分裂が確定した。

536年、高歓配下の侯景が七万の軍勢で南進してきたが、陳慶之は独力でこれを撃退する。梁はこれを機会に北伐の再開を図るが、高歓は宇文泰との対決を優先し、梁に講和を求める。梁はこれを受け入れ、これより両国の間を使者が往来するようになった。539年10月、陳慶之は五十六で亡くなった。梁の都建康が侯景によって劫掠を受けるのはその九年後のことである。

§ 5. 洛陽伽藍記における陳慶之の北伐

洛陽伽藍記において陳慶之の北伐が語られるのは、卷二城東においてである。洛陽小市の北に南朝からの亡命者である張景仁の邸宅があったことに関連して話が始められる。張景仁は、当初は江南人が多く住む城南の呉人坊と呼ばれた地区に居宅を与えられたが、同地には江南人の好む水産物を扱う魚鱉市が立っており、張景仁はこれを恥じて城東へ転居したというエピソードがまず語られる。食文化の異なる江南人に対する洛陽の人々の差別意識が窺われる。

張景仁は、魏の江南人に対する優遇政策により高官として処遇されていた。元顥を擁した陳慶之が洛陽を占領した際、少なからぬ北魏の官吏が城内に残留しており、張景仁は旧知の陳慶之を自邸に招いて接待するが、その際に同席した中原の士族、楊元慎は勝ち誇る陳慶之に対し次のように南人を誹謗した。

- ・湿地が多く、虫が群生し、病気になりやすい気候
- ・住民は小柄で入れ墨をしている
- ・水上生活者は文明化しておらず、法令に従わない
- ・秦の時代に追放された者、漢の時代の流刑者の子孫
- ・中原の言葉が混じっているが、閩や楚の訛りは直らない

以下、南朝の風紀の乱れや暴虐を詰る言葉が続くが、北魏の皇族も似たようなものであり、この程度の誹謗に陳慶之らが一言も言い返せなかったとは思えない。また数日後に陳慶之は胸に痛みを覚え楊元慎に治療を依頼したが、楊元慎はろくに治療もせ

ず、南朝の食文化などを誹謗するのみだったと続く。にもかかわらず以後陳慶之は、北の人間に一目を置くようになったと結んでいる。

さて、以上のような洛陽伽藍記の記述を解釈する際には、著者の楊銜之の立場を踏まえなければならない。楊銜之は他の史書では確認できず、仏教関係の書物などから北魏末の官人と推測されている。従って楊銜之が、六十五日間の元顥の洛陽支配の間にあったとされる陳慶之と楊元慎の間のやり取りを、直接に伝聞した可能性は否定できない。事実、洛陽伽藍記には、これ以外にも北魏末の多くの事件に関するエピソードが寺院や街区の解説の間にはさまれており、楊銜之が当時の洛陽の事情に通じていたことは確かである。

しかし前述したように、この六十五日間のうち少なくとも最初と最後の数日間は、陳慶之は洛陽の城外で戦闘を指揮しており、仮に激務の合間を縫って旧知の張景仁が設けた宴席に出ることがあったとしても、それは相当に政治的な意味合いを含むものであっただろう。在野の知識人だった楊元慎自身は、占領軍の指揮官である陳慶之に媚びる必要が無かったのかも知れないが、このような席での南人批判は宴席の主旨を考えればかなり場違いなものであり、事実であったとしても主催者の張景仁らは当惑したのではないかと思われる。

§ 6. 終わりに

上で検討したように、洛陽伽藍記における陳慶之上洛時のエピソードは、南人に対する批判としてはいささか感情的なものであり、南北比較論としては例えば南朝の階級社会や男尊女卑を取り上げた顔氏家訓の方が具体的である。陳慶之上洛時のエピソードに見られるように、洛陽伽藍記の南人に関する記述は著者の政治的立場、心情的動機を背景にしたものが多く、それらを歴史史料として取り扱う場合には留意する必要があるだろう。

参考文献

- 川本芳昭 『魏晋南北朝時代の民族問題』 (汲古書院、1998 年)
顔之推、宇都宮清吉 (訳注) 『顔氏家訓 1 - 2』 (平凡社、1990 年)
魏收 (編) 『魏書 1 - 8』 (中華書局、2017 年)
谷川道雄 (編)、池田温 (編)、佐竹靖彦 (編)、堀敏一 (編)、菊池英夫 (編) 『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』 (汲古書院、1999 年)
譚其驤 (編) 『中国歴史地図集 第四冊：東晋十六国・南北朝時期』 (中国地図出版社、1996 年)
宮崎市定 『宮崎市定全集〈7〉 六朝』 (岩波書店、1992 年)
安田二郎 『六朝政治史の研究』 (京都大学学術出版会、2003 年)
楊衒之、入矢義高 (訳注) 『洛陽伽藍記』 (平凡社、1990 年)
姚思廉 (編) 『梁書 1 - 3』 (中華書局、2015 年)
李延壽 (編) 『北史 1 - 1 0』 (中華書局、2013 年)
李延壽 (編) 『南史 1 - 6』 (中華書局、2016 年)